

学校図書館が「生きる力」教育を救う

School libraries save the power to live of education

宍 道 勉
(鳥取大学非常勤講師)

キーワード：学校図書館，調べ学習，学習指導要領，司書教諭，読書

1. 本論の目的

学校図書館現場で図書館資料を使って学習指導を行う，題して「レファレンスごっこ」が「新・学習指導要領（以下「要領」）が勧める「生きる力」教育と現場教育の難しい現状を救う，その方法の理論と実践報告である。

2. 「生きる力」教育の理念・目標と現状

(1) 「要領」その理念・目標

「基礎的な知識・技能を徹底して身に付けさせ，それを活用しながら自ら学び自ら考えるなどの「確かな学力」を育成し，「生きる力」を育むことが基本的な理念・目標」に掲げている。^{【注1】}

(2) 「生きる力」の基本的な考え方

「学力の重要な3つの要素を育成する」として以下が求められる。

- ・基礎的な知識・技能をしっかりと身に付けさせる
- ・知識・技能を活用し、自ら考え、判断し、表現する力をはぐくむ
- ・学習に取り組む意欲を養う^{【注2】}

これに基づいて，次の目標を掲げる。

「基本的要素」を基に，2020年度から試行される「幼稚園教育」「小・中学校」および「高等学校」それぞれの教育課程に共通する「生きる力」教育では知識の理解の質を高め資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」を求める。^{【注2】}

(3) 主体的・対話的で深い学びの内容と方向

－1 「主体的な学び」とは

- ・学ぶことに興味や関心を持つ
- ・学習内容を自分のキャリアの方向性と関連づける
- ・学習の見通しを持ち粘り強く取り組む

－2 「対話的な学び」とは

- ・自己の考えを以下の3つの方法で広げ・深める
- ・子ども同士で協働（協力して共に学習を進める）
- ・教職員や地域の人との対話
- ・先哲の考え方を手掛かりにする

－3 「深い学び」とは

- ・知識を関連付ける
- ・問題を見つけ解決策を考える
- ・思いや考えを基に創造する

そのために①(知識の)習得 ②(習得した知識の)活用 ③探究のステップで学習を進める。

(4) 「総合的な学習の時間」の活用

「要領」はさら「国語科」の目標を次の通りとする。

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。さらに具体的には、

- ・相手に応じ、身近なことなどについて、事柄の順序を考えながら話す能力、大事なことを落とさないように聞く能力、話題に沿って話し合う能力を身に付けさせるとともに、進んで話したり聞いたりしようとする態度を育てる。

- ・経験したことや想像したことなどについて、順序を整理し、簡単な構成を考えて文や文章を書く能力を身に付けさせるとともに、進んで書こうとする態度を育てる。

- ・書かれている事柄の順序や場面の様子などに気付いたり、想像を広げたりしながら読む能力を身に付けさせるとともに、楽しんで読書しようとする態度を育てる。【注3】

(5) 調べ学習へ

「総合的な学習の時間」に「探究的な学習」として「調べ学習」を位置づけ、教科書以外の図書や資料を調べたりする学習活動が様々な形で取り入れられた。そこで課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力を育み、主体的に学習に取り組む態度を養う新しい「要領」の趣旨に即した取組もうとしている。なおも「変化の激しい社会に対応して、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることなどをねらいとする」という。そこでは「思考力・判断力・表現力等が求められる「知識基盤社会」の時代においてますます重要な役割を果たすものである」と考えたのである。

それに基づいて以下の例が一般的に推奨されている。

- 1 課題を考え、情報を得るために、学校図書館を利用したり、インターネットを活用したり、現地で観察・調査・インタビューしたりする。
- 2 こうして得た材料を整理し、文章その他にまとめる。
- 3 級友など人の前で発表し、評価をうける。【注4】

この活動を現在多くの学校は「自ら学び自ら考える力の育成」をめざす有効な方法と考えている。

(6) 調べ学習の実態

前項の実状を確かめるため、論者は担当する「司書教諭科目」受講教師に「調べ学習」の時間を「生きる力」教育として実施しているかと尋ねた。ところがその回答による「調べ学習」の内容を見ると「要領」の求める「自主的な学び」教育とは程遠いものである。

つまり現実の「調べ学習」のほとんどが「図書館を利用(使用)する」とは1)学校の年度方針で決めた「調べるテーマ」に基づき、予め学校司書がそのテーマに関する「資料」を自校の図書館、近隣の学校図書館、地元の公立図書館に依頼し借り出し、それを図書館に用意しておく。2)そして「調べ学習」の時間に、児童生徒は教師の「指示に従って」(「自主的」ではない)資料を読み、メモをし、回答用紙に記入し、発表する、ことである。その一連の流れ

も結果も「自主的でないから」当然のことながら「全員同じ」となる。つまりその「調べ学習」の中には「自主的な学び」がどこか不明なのが現状である。論者もその機会を得て様子をうかがったが全くその通りであった。

こうして論者は「生きる力」教育に基づく「調べ学習」を再考することで、今回報告の理論を打ち出したのである。

3. 「要領」と司書教諭科目

こうした点を考慮の結果、「生きる力」の「学習指導」が可能なのは「学校図書館の活用」を措いて他にない。そこで初めて連続的・総合的に実現できると確信したのである。

そして「学習指導と学校図書館」を統合して学ぶのに最も適当な方法が「学校図書館司書教諭講習」科目である。ご存知かもしれないが「学校図書館法」は全ての「学校」に司書教諭の設置を義務付けており、同法第3条に規定する「学校経営と学校図書館・学校図書館メディアの構成・学習指導と学校図書館・読書と豊かな人間性・情報メディアの活用」の5科目を取得することで司書教諭「資格」が得られる。^{【注5】}

本論の「生きる力」教育の指導法は上記5科目いずれにおいても共通するところであり、すでに実施している。さらに、この「教育」指導法に関しては必ずしも上記「科目の講義」にとどまらない、他の教職科目においても可能であるし行うべきである。

4. 「生きる力」教育の指導方法

これから述べる教育プログラムは論者のオリジナルである。これが「要領」の序章「国語の目標（総合）」の「学習（教科）指導」に十分に沿うものであることをお分かりいただけるであろう。

（1）「生きる力」の意味を捉えなおす

「生きる力」の「力」とは生きるための「能力」つまり総合的な力である。しかし「自主的な学び」を考えるときの「能力」はむしろ「習慣」と考えるのが分かりやすい。そう考えれば「学ぶ力」とは「学ぶ」習慣であり、それが「自主的な学び」を意味し、自ら進んで行動することが「主体性」であると理解できるはずである。

（2）「生きる力」教育を理解できない疑問と理由

それではなぜ現在の小中高学校は「生きる力」と「学ぶ習慣」を認識・理解しできなかったのだろう。答えは簡単で、「専門職としての」教員資格の教職課程において、教育の「内容と方法」を「教えられる」ものの「主体的な学び」教育の「方法」を「教えられた」経験がなかったのである。つまり「主体的学び」を経験しないで教師になったのであり、その「意味」や「意義」を知らないのは当然である。

論者がその事実を認識し「生きる力」教育の不十分さが分かったのは「司書教諭講習」を担当して以来であり、その実態を知るのは受講者の「レポート」が後押しとなったのである。

そこで次に述べる教育の新しい方法を思い付いたのである。

（3）「生きる力」教育～「調べ学習」の新手法～

そこで「調べ学習」の変形し、その名称を「レファレンスごっこ」と名付けたのである。

つまり「レファレンス」とは「調べ（る）」の英語表記であり、また図書館員（図書館司書、司書教諭）の業務「レファレンス・サービス^{【注6】}」の「レファレンス（参考・参照）」の意味も含まれる。「ごっこ＝何かの真似をする遊び」としたのは、児童生徒に親しみと取り組みやすさを与えるための仕掛けである。

－1 教育の「舞台」と内容

- ・これまでの「調べ学習」授業の舞台は「学校図書館」と「教室」である。ここでは教師が常に舞台を作り（机配置など）課題＝テーマを与え、小道具（教科書、副読本等）を揃え、シナリオ（授業進行＝指導案）を作成し、学習指導（演出）を終え、成果達成（成績）まで一方的に全てを統括する。だから演者（児童生徒）は教師（演出家）の「演出（指導）」の言うままシナリオ通りの演技だけを実行する。そこに観客はいない。

- ・一方「レファレンスごっこ」授業の舞台は（学校）図書館だけである。そこで演者（児童生徒）は自分たち自らが設定する「テーマ＝課題」に基いて演技を行う。そこに「演出家」は不要で教師は「観客」（あるいは共演者）として存在する。

さて本論の「レファレンスごっこ」は児童生徒が自分たち設定したテーマに基づいて選んだ「本」の紹介をシナリオとする演技であり、グループ学習法である。¹⁾

－2 劇公演までの順序

a. 劇団（グループ）編成

- ・劇団を演技者5～6名のグループ編成する。

b. 小道具

- ・小道具1：目録カード

演技者が「作る」小道具で、テーマ決定やシナリオ作成の記録である

- ・小道具2：国語・漢和辞典

c. 舞台

- ・劇団（グループ）ごとのテーブル設置

4. 「レファレンスごっこ」の「テーマ」設定

1) 「しりとり」でテーマを決める

- ・団員（児童生徒）が順に、一人が2つの「ことば」を選ぶ

（「ことば」が浮かばない団員には「国語辞典」の参照を勧める）

- ・しりとり「ことば」を「目録カード（図1参照）」に記入する（位置③）

- ・全員でみんなが選んだ中から一つの「ことば」を決定し、その劇団の「テーマ」とする（位置①）

2) 選んだ「ことば（テーマ）」について考える

- （1）「テーマ」とした「ことば」の定義を考える

- ・脳内辞書で自分の「定義（意味）」を考え「カード」に記載する（②）

- （2）「国語辞典」の「見出し」にある「ことば」を参照する

- ・「見出し」の下に記載されている漢字表記を記入する（④）

- ・「国語辞典」（見出し）に記載されている語義（意味）の中から、最も適当と思うものを同じ「カード」に書き写す（⑤）

- ・使用した「辞典名」を記入

- 3) 「レファレンスごっこ」テーマの検討（「ことば連想ゲーム」）
 - ・劇団内で②④に記入した「意味」を公表する
 - ・他の団員の公表から参考となる，気に入った「事柄」，またそれを聞いてさらに連想（インスピレーション＝閃いた事柄の人，ものなどなんでも良い）したことがあれば記入する（⑥）
 - 4) 図書館の書架に移動する
 - ・演技1：本を選ぶ
書棚）を見ながら，カードの「ことば（事柄）」から「ピン」ときた，興味ある，気に入った，などのインスピレーションでこれぞと思う「本」を選ぶ。
 - ・2～3冊選んだら，劇団のテーブルに戻る。
 - 5) 演技2：「本」の記録
 - ・選んだ「本」の書名，著者（作者），出版社，出版年を記入（⑦）
 - ・概要：「本」の書名，序文，目次，あとがき，本文を読み内容メモ（⑧）
 - ・選んだきっかけ・理由：予想もしていなかった感動，感激の喜び（⑨）
 - 6) 演技3：リハーサル
 - ・各劇団内で各自「記録カード」⑧⑨をシナリオとして「テーマ」からその「本」を選ぶに至るまでの理由，手順，流れを話す（演技）
 - ・劇団内で演技（発表）順序を工夫する
 - 7) 「レファレンスごっこ」の公演
 - ・全劇団のが交代で演技（発表）する（実施例は図2を参照）
 - ・劇の鑑賞
参加者全員（児童生徒）と教師（司書，司書教諭）
 - 8) 「レファレンスごっこ」の評価
 - ・全公演が終わったら，気に入った本，読みたくなった「本」について意見交換する
-
5. 「生きる力」教育で備わる，身に付く能力（習慣）
 - 1) 参照力 **referring skills**
 - ・出会いの「ことば」を「国語辞典」で参照する習慣
 - 2) 造語力＝創造力 **creating skills**
 - ・テーマと決めた「ことば」の「意味」を自分で考え創る習慣
 - 3) 選書力 **selecting skills**
 - ・テーマの「ことば」とその意味のインスピレーションによって，書棚からひらめいた本を選ぶ
 - ・テーマの「ことば」がタイトル（書名）として「本」付いているを探すのではない
 - 4) 本を読む力＝**reading skills**
短い時間に，選んだ「本」のタイトル，序文，目次，あとがき，本文から概要を読み取る。
 - 5) 文章力 **writing skills**
「本」の概略として要点と，出会った喜び（セレンディピティ **serendipity**）を記録する。それは「経験したことを文章を書く，進んで書こうとする態度を育てることになる。
 - 6) 発表力 **presentation skills**

「劇団」メンバー、のちに全員に概要紹介（ブックイントロ）を行う。また他の団員の紹介を聞く。これが「相手に話す能力、大事なことを聞く能力、話し合う能力・態度を育てる。」に相当する。

以上のことから、「レファレンスごっこ」は学校図書館における学習指導の一つとして、「生きる力」教育が求める「主体的・対話的で深い学び」に対応できると考える根拠である。

6. 「レファレンスごっこ」の利点と教育・学習効果

1) 授業へのスタートを円滑にする

「ことば」を「しりとり」で選ぶことは、どのような教科にも親しみを持って受け入れらる。

2) 「国語辞典」を参照する（引く）習慣

児童生徒は「国語辞典」を「参照 refer」しその「ことば」にぴったりの「語義」を選ぶことで正確に理解できることを知る。

また「紙の辞典の使い方」を再認識することで、改めて「学習（教科）指導」に辞典を活用する、見直すことへの期待がある。

3) 「テーマ＝ことば」から「自分独自の表現」を思い付く能力

これを論者は **creating skills**＝創造（表現）力と名付け、またこの流れを「ことば連想ゲーム」と命名した。（例えば「ことば＝本」から浮かぶ読書、感想、小説などのように）

これは「要領」の「国語科」に掲げる「国語を適切に表現し正確に理解する能力」に相当すると考えられる。

4) 本を読む＝**reading skills** 能力と文章力 **writing skills**

出会った（選んだ）本のタイトル、序文、目次、あとがき、本文を読んで概要（内容）を文章にまとめる能力を育む。ただし、事前に「本」は「全てを読まなくて良い」ことを知らせておく。

これは同じく「要領」の「国語の目標」である「読む能力を身に付け、楽しんで読書しようとする態度」を育てる。」を指し、また文章として記録することは「経験したことを文章を書く能力、進んで書こうとする態度を育てる、に相当する。

5) 作成「カード」から本との出会い（選択）

作成した「カード」を手にし、図書館の書棚を読みながら、自身の感動、感激、興奮をもって「本」を発見する喜びを与える。それは「自分」の発見でもあり、「自我」の形成となる。本を選ぶ行動（演技）は「選書力 **selecting skills**」を育む。これは偶然と新しい考えを生み才気を生かすセレンディピティ能力²⁾を育む。

6) 本の紹介能力＝**presentation skills** と聞く能力

「レファレンスごっこ」では選んだ本の紹介をするとともに、他の団員の紹介を聞く。これが「相手に話す能力、大事なことを聞く能力、話し合う能力と態度を育てる。」に相当する。

7. おわりに：「レファレンスごっこ」の今後と課題

1) 教師の問題

教育学者大田堯氏³⁾の発言によれば

「教育者は得てして、子供を大事にすると口には言うものの、実際には自分の思うようにしたいという気持ちの方が強い。」「教師はとにかく子どもたち（全て）を自分の思い通りにしようとする、それを教育と考えている。」「教師は教える「主体」になるため「方法」だけを覚えようとする」が日本の現実である。となれば「要領」が勧める「主体的な学び」を目指す「レファレンスごっこ」が極めて容易な方法であっても、「自分の思い通りに教えたい」「画一的」教育からの脱却など、教師にとっては「新しい指導法」にもいささか抵抗があるのではなかろうか。

2) 学校図書館の問題

最近の学校図書館は利用者を図書館に呼び寄せるため、易しさを重視し漫画および読み物など「品位」にかける資料が多い。「レファレンスごっこ」を実施する以前に、上記に述べた成果を上げるためにも蔵書内容を把握し考慮する必要がある。

3) 内容の検討

「レファレンスごっこ」には色々のヴァージョンを考えることができる。発達段階に応じて小学校低学年から上は高校生、大学生（一般市民）にも受け入れられる。参加者の興味関心に応じて行う必要がある。

4) 公共図書館の協力

幅広い蔵書を擁する公共図書館で実施することも考慮すべきである。このことは「要領」が「生きる力」教育の児童生徒の社会参加には地域住民など大人の協力が重要であるとしている。

5) 「レファレンスごっこ」の普及

以上を見る通り、難しい知識、技能が不要である。つまり誰でも実行可能である、あらゆる図書館でこの方法を認識すれば、いかなる図書館においても、いかなる対象者に対しても実行できる。

【注】

【注1】学習指導要領「生きる力」の理念・目標（文科省

HP)http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo6/gijiroku/attach/1379502.htm

【注2】学力の重要な3つの要素（同

HP)http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/idea/1304378.htm

総合的な学習の時間（文部科学省 HP

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/sougou/main14_a2.htm）

【注3】第2章 各教科 第1節 国語第1 目標（総合）（文部科学省

HP)http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/koku.htm

【注4】ニューワイド学習百科事典：

<https://kids.gakken.co.jp/jiten/4/40007030.html>

【注5】司書教諭の講習科目のねらいと内容（文科省 HP より）

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/link/1327211.htm

【注6】レファレンス・サービス

利用者からの質問・情報要求に対して「参考資料」を駆使して回答や情報（資料）を提供する図書館業務（サービス）の一つ

【参考・引用文献】

- 1) 宍道勉・天野佳代子・新家憲一郎「学校図書館における『図書館利用教育』で自主的な学びを考える -辞典カードの導入-」『図書館学』101 号,pp15-22,2012 年
- 2) 外山滋比古「乱読のセレンディピティ」（扶桑社文庫，2016）
- 3) 大田堯自撰集成第2巻「ちがう・かかわる・かわる〔基本的人権と教育〕」（藤原書店，2014）

「レファレンスごっこ」記録カード（表）(図1-1)

①劇団で決めた「ことば」

自分の脳内辞書で考えた「語義」

①ことば=ひらがな	②○○○○○○○○○○○○○○○○○○
④漢字表記	5○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○ 国語辞典の「語義」 (使用辞典名「○○○」)
③ (「しりとり」に出た「ことば」) ○○○, ○○○ ○○○, ○○○ ○○○, ○○○ ○○○, ○○○ ○○○, ○○○	⑥「ことば」から「これ!」とひらめいた事柄○○○, ○○○, ○○○ (「図書館の書架に移動し「本」を選ぶ」) ⑦図書館で選んだ「本」の記録 ・「書名」「著者(作者)」「出版社」「出版年」
出会うの記録 ↓(出会った日)	○ (出会ったところ)

(図1-2)

「レファレンスごっこ」記録カード（裏）

⑧概要： ・本のタイトル、序文、目次、あとがき、本文を読み内容を書く ・ _____
⑨選んだきっかけ・理由： ・予想もしていなかった感動、感激、興奮の喜び ・ _____
(発表＝演技メモ) <div style="text-align: center;">○</div>

(図2-1)

「レファレンスごっこ」記録カード（実際例）

(①りんご) ④林檎	<div style="border: 1px dashed black; padding: 2px;">②秋になると赤い身のなる少し酸っぱいが甘い果物</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">⑤バラ科の落葉高木、中央アジア原産。寒冷地に適する</div> <div style="text-align: right; font-size: small;">(使用辞典名「広辞苑」)</div>
③(「しりとりに出たことば」) トリ、リス、スタチ チエ、エダ、ダルマ マンガ、ガス、スリ リンゴ、○○○ ○○○、○○○	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">⑥赤、万有引力、白雪姫、アダムとイヴ</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> ⑦図書館で選んだ「本」 ・「アダムとイヴ - 語り継がれる「中心の神話」」岡田温司著、中央公論社、2012 ・「ニュートンに消された男」ロバート・フック著、朝日新聞社、1996 </div> <div style="text-align: center;">○</div> <div style="text-align: center;">(鳥取大学附属図書館)</div>
(2018.08.22)	

(図2-2)

「レファレンスごっこ」記録カード（実際例裏）

⑧概要： ・この神話から現代までどのように語り継がれているかが書かれている。日頃耳にしない話題がある。 ・ニュートンと同時代の科学者であるのに、あまり知られていない人の話
⑨選んだきっかけ・理由： ・「アダムとイヴ」のことは知っていたが、どんな話なのか興味があった。 ・ニュートンの万有引力ニュートンの万有引力走っていたが、タイトルの「消された男」の言葉が気になった。
(発表＝演技メモ) <div style="text-align: center;">○</div>